

目標は《住みよさナンバーワン》のまち 《ちよつといいいまち》に子育て世代共感

人口増の要因は子育て世代と年少者

日本有数の茶どころ・遠州(静岡県)にあって、世界農業遺産にも認定されている《静岡の茶草場農法(詳細は後述)》の伝統を近隣自治体(掛川市・島田市・牧之原市・川根本町)とともに継承。同時に《深蒸し茶》の発祥地としても広く知られる菊川市は、平成17年1月、小笠郡菊川町・同小笠町の合併により、新市としての歩みをスタートした。

現在4期目を迎えている太田順一市長は、旧菊川町の町長から、菊川市誕生に伴う市長選で当選。以来、今年1月で丸15年の節目を迎えた菊川市政を、けん引し続けてきた。

そんな太田市長が就任以来、一貫して職員に問い掛けてきたのは「本当の意味で住んでみたいまち、住みやすいまちとはどのようなものなのか」ということだったという。

折しも合併4年目の平成20年、少しずつ増

加していた人口がピーク(4万9971人)を迎え、翌年から微減を続けるようになった。大都市圏を除く全国の地方都市と同様、菊川市も定住人口の確保という最大の地域課題に直面することになったのだ。

ところが近年、その菊川市にちよつとした異変が起こっている。人口が少しずつ増え続けているのである。

人口が増え始めたのは平成28年度からだ。平成27年3月の4万7679人で下げ止まりとなり、翌年3月には4万7823人に微増。さらに令和元年12月の時点では4万8598人と、ピーク時の人口に、じりじり近づきつつある。

「ここ数年にわたり人口が微増を続けている現象の主体は、正直なところ、市内と近隣自治体の自動車関連産業の企業などに勤務する、ブラジル人を中心とした外国人居住者が担っています。その一方で、子育て世代を中心に、日本人の若い居住者も少しずつ増えて

おたじゅんいち
太田順一
菊川市長

います。そこは、近年の菊川市の人口動態における強みだと感じています。

菊川市は平成21年以降、増加に転じるまで7年間にわたって人口は減少しましたが、交通至便な土地柄のせいも、もともと人口減少率は静岡県内でもかなり低い方でした。そして増加に転じてからは、日本人も外国人居住者も20歳代・30歳代が増加しており、付随して子どもの数(0〜14歳の年少人口)も伸びています。





菊川市の市域には随所に広大な茶畑が展開

一番近い平成27年度の国勢調査では、静岡県内において最も年少人口が増加したのは菊川市でした。というより、平成22年の国勢調査から27年の国勢調査までの5年間で、年少人口が増加したのは静岡県35市町の中で菊川市だけだったのです」(太田市長)

人口減少そのものは、国全体の構造的な問



人口増を象徴するJR菊川駅北口側の新興住宅街(マンション群)

題であり、現時点では不可避なものであると捉えざるを得ない。しかし、人口減少の流れをいかに抑制していくかという全国共通のミッションを考えた場合、菊川市における現在の子育て世代の増加や、年少人口の増加現象はそれ自体、大都市圏以外では全国的にまれな事例といえるだろう。

こうした現象をより安定的なものとし、持続可能な地域社会の構築へとつなげていくためには、当然のことながら、子どもたちが成長した後の転出数をいかに減らすかということが、最重要課題になってくる。菊川市ではこの転出数を抑制するとともに、既に暮らしている市民が「住んでいてよかった」と改め



「これらの施策は、平成28年度に市民協働

家庭医療のロールモデル 《静岡(菊川)方式》

て実感できるような、また移住・定住者のさらなる増加を促進するような《住みよさナンバーワン》のまちづくりをスローガンに、現在、次のような重点施策を展開している。「子どもがいきいき育つまち」「健康で元気に暮らせるまち」「活気にあふれ地域の良さを伸ばすまち」「快適な環境で安心して暮らせるまち」「まちづくりにより市民と行政が共に取り組むまち」の実現だ。



菊川市家庭医療センター（あかっちクリニック）のゆったりした待合室

「子育て応援課」と、子ども・子育て支援事業計画や待機児童対策、地域型保育事業の認可、幼保関連の各種事業などを分担して管轄する「子ども政策係」「幼保子ども園係」で構成される「子ども政策課」がある。《子ども未来部》は要するに「就学前の子どもに関する事務のワンストップ化を図る部署」（太田市長）で、妊娠・出産・育児までの切れ目のない支援を、よりの確かつ充実した形で提供するための機構改革だ。

それらのことを踏まえた上で、今回の取材において改めて注目されたのは、「菊川市家庭医療センター（あかっちクリニック）」の存在だった。前述の「5つの基本目標」の「健康で元気に暮らせるまち」を推進するに当たり、市民の健康管理を最前線で担う役割を果たしているという意味で、また医療機関の少なさが以前から指摘されていた静岡県・中東遠エリアの課題解消策という意味でも、《菊川市家庭医療センター》は大きな存在感を發揮している。

「菊川市家庭医療センターは年少者から高齢者まで全ての市民の健康管理を担う、プライマリ・ケアの拠点的な医療機関です。センターでは家庭医（総合医）の専門教育を受けた医師たちが診療しますので、従来のような臓器別の診療科はありません。

健康管理をはじめとした、従来の小児科・産科も含めた全般的な各科の初期医療を、年齢に関係なく総合的に実施しています。自宅

介護中の高齢者に対しては看取りまで行います。全ての市民を患者対象とした、文字通り総合的なかかりつけ医療、家庭医療の実践の場なのです。そして手術などの必要が生じた場合には、連携関係にある地域の基幹病院・菊川市立総合病院で実施します（太田市長）

菊川市家庭医療センターは同時に、静岡県および静岡県・中東遠エリアの菊川市・磐田市・森町が連携し、平成22年度から開始した静岡家庭医療養成プログラムの拠点施設ともなっている。エリア内には、菊川市家庭医療センターに続いてできた森町家庭医療クリニックがあり、やはり地域の基幹病院と連携している。平成27年度からは御前崎市の御前崎市家庭医療センターもグループに加わり、同様の方式で家庭医療を展開している。

この静岡県・中東遠エリアで実施されている家庭医療養成プログラムは、提携する浜松医科大学、家庭医療学の世界的なセンターでもある米国ミシガン大学医学部が運営している。そこで家庭医療学を学ぶ医師たちは磐田市の高度急性期病院《磐田市立総合病院》や、エリア内の各家庭医療センターで研修を受けることができる。

このようにして現在、3市1町の4病院3クリニックによる家庭（総合）医療ネットワークが生まれ、診療だけにとどまらず、家庭医（専門医）養成のネットワークまでもが形成されているのだ。

「菊川市ではこのプロジェクトに当初から

で策定した『第2次総合計画』に掲げる『5つの基本目標』でもあるのですが、実際問題として、策定と同時に菊川市の人口が増加に転じたのは、単なる符合だったとしても、気分は悪くありません（笑）。本市としてはこの勢いを引き続き維持するべく、さらに積極的な気持ちで目標達成に向け、各種の施策・事業を実践していきたいと思えます」（太田市長）

「5つの基本目標」のうち「子どもがいきいき育つまち」を例に挙げると、例えば本年度から、菊川市では《子ども未来部》を新たに発足させた。子ども未来部には「子ども福祉係」と「母子保健係」「発達支援係」で構成される

菊川市

市 政 ル ポ

(静岡県)



市制施行15周年で開催された記念コンサート(産業祭)

参画し、新たな地域の初期医療拠点としての菊川市家庭医療センターを真っ先に設立するなど、非常に力を入れてまいりました。

家庭医療センターは国の後押しなどもあり、全国各地に誕生しつつあります。しかし、私たちの地域のように、自治体が広域のグループを形成し、医療の人材育成にまで実績を上げている事例は、全国的にも珍しいのではないのでしょうか。同時にこうした地域医療体制の拡充は、持続可能なまちづくりを推進するための医療面からの裏付けという意味でも、非常に心強いプロジェクトといえます」

(太田市長)

菊川市家庭医療センターなど3市1町が広域連携で実践する家庭医療、および静岡家庭



小学生のお茶手もみ体験

医療プログラムは、従来の医療圏主義を進化させる新しい形として、医療界からも大きな注目を集めている。

移住・定住促進にも効果的な茶産業の振興

菊川市の特色、地域特性の観点から注目される施策の動きとしては、伝統的な地場産業である茶産業の振興がやはり興味深い。

冒頭で触れたように菊川市の地場産業である茶園は、掛川市・島田市・牧之原市・川根本町の茶園とともに、今も伝統的な茶草場農法を継承している。茶草場農法とは茶畑の畝と畝の間に、秋に刈られた草(ススキ、ササ



茶葉のブレンド作業などが行われた「赤れんが倉庫」(明治中期建築)

など)を敷いて肥料とする農法を指す。これは静岡県でも当該地域の茶園だけに見られる特徴だそうで、草を地面に敷くことで、茶葉の品質が向上するという。同時に地味豊かな茶園環境の維持・保全にも役立つ。

このように自然を生かした農法に育まれた肉厚の茶葉を、製造の過程で深く蒸すことで生まれる深蒸し茶の製法は、菊川市の茶園で発祥した。菊川の深蒸し茶は現在、高級煎茶を代表する茶葉としても知られる。しかし、茶葉の全体的な消費量の低下や、それに伴う生産者側の担い手不足、後継者不足などが憂慮されている。

「明治時代初期に生産が始まり、戦前には有力な輸出品として欧米でも人気を呼んだ菊



400年以上の歴史を持つ「千框(せんがまち)棚田」



千框棚田では市民ボランティアが田植えと刈り取りを実施

出展し、深蒸し茶を国内外にPRしました。このイベントには世界中から、お茶の流通業者やお茶ファンが参加するのです。菊川市としては、今後ともそうした地道な努力を続けながら、茶産業をはじめとする農業振興の試みを、事あるごとに実践していきたくと考えております(太田市長)



地域の代官屋敷だった黒田家住宅(国指定重要文化財)

川のお茶、ならびに静岡全体のお茶の生産を上げる特効薬は正直ありません。お茶はベクトルボトル入りという現代人の常識を覆すような、新しいお茶習慣とでもいうべき潮流を根本的な部分で起こすしかない。それは農業振興全般にもいえる、非常に難しいミッションです。しかし、深蒸し茶の発祥地・菊川としては、何とか時代を先取りするような、《菊川型農業モデル》を創出し、それを一般的な農業振興にもつなげていきたい。

昨年はそうしたことから、園地整備に関する生産者支援を行ったほか、3年に一度開催される『世界お茶まつり』(7回目)が島田市をメイン会場に行われましたので、例年通りに

川』の発信は、移住・定住の促進に向けたイメージアップの要素としても有効と思われる。例えば交通至便な地理的環境(JR東海・菊川駅、東名高速道・菊川ICがあり、新幹線・掛川駅や富士山静岡空港および御前崎港からも至近)を有し、自動車関連産業を中心に各種製造業、物流業などの企業進出が充実した菊川市には、同時に富士山を遠望するビュースポットも随所にある。広大なお茶畑や棚田などが、子育てにびったりの豊かな里山風景を形成する。世界農業遺産認定の茶園風景は、まさにその象徴で、シテイプロモーションMOVIEでも重要

な背景になっている。「菊川を一言で言い表すと《ちよつといいまち》ではないでしょうか(笑)。市域がコンパクトなので、どこに行くにも近い。富士山が遠くに見える茶園風景や棚田風景など、程よい自然環境が豊富にある。新幹線や空港、ICなどが近くにある。内陸部ですが、車でちよつと行けば海(御前崎など)も遠くない。静岡市と浜松市の間であり、企業進出が盛んなので雇用の場にも恵まれている。

先ほど言いましたように、国内外の若い人たちが少しずつ、でも着実に菊川へ引っ越してきてくださるようになった要因の一つは、手厚い子育て支援・教育支援などとともに、



市内に立地するブラジル人学校

案外、そうした《ちよつといいところ》にも、あるのかもしれないね」(太田市長)

外国人材導入に伴う 新たな国際化への予兆

外国人居住者の増加の背景としては、菊川市独自の《暮らしやすさ》もあるのではないだろうか。さらに多文化共生の実現を目指す、菊川市の積極的な姿勢も大きい。

「菊川市で暮らす外国人居住者は現在、約3700人です。人口の8%ほどを占めていることとなります。そのうちの約60%がブラジル国籍で、フィリピン国籍が約20%。ト

タルで約30カ国の国籍を持つ人々が暮らしています。昨年4月には外国人材の導入を促進する新しい在留資格を国が設けたことなどもあり、外国人居住者の増加傾向は今後も続いていくことでしょう。

将来的に本格的な移民問題の論議がどう進展していくのかはまだ分かりません。しかし、外国人材の導入があらゆる局面で求められるのは確実で、90年代から外国人の集住化を経験してきた菊川市には、そうなった場合のアドバンテージがあると自負しています」と太田市長は語る。

菊川市では多文化共生のポイントはこれまでの経験上、《ことばの壁》《制度の壁》《こころの壁》に集約されると捉え、市民協働でこれらの《壁》を打ち破るための工夫を多角的に推進している。

具体的には市民ボランティアを募り、《語学サポーター》《日本語指導サポーター》《文化紹介サポーター》《ホストファミリーサポーター》などの活動からなる「菊川市多文化共生サポーター制度」を創設。外国人居住者がより暮らしやすくなるよう尽力している。

従来の対外的な国際化とも違う、国内的な国際化ともいえるべき、外国人材の導入に伴う国際化の準備は、菊川市においては既にできつつあるといえるだろう。同時にこうした外国人居住者にオープンな地域性は、今後、日本の若者たちの関心をも惹き付ける可能性があるのではないだろうか。その萌芽は、冒頭



本年3月供用開始の庁舎東館は賑わい創出事業の拠点

で紹介した、国内外の働き盛り世代が増えつつある、菊川市独自の人口動態の現況からも、類推されてくるように思われる。

さらにそれは、太田市長が就任以来、職員に問い掛け続けた「本当の意味で住んでみたまち、住みやすいまちとはどのようなものなのか」という設問への回答に近づくための、一つのアプローチにつながっている事柄なのかもしれない。

いずれにせよ《ちよつといいまち・菊川市》が目標とする《住みよさナンバーワン》のまち実現に向けたトライに、これからも注目をしていきたい。

(取材・文：遠藤隆／取材日令和元年12月19日)